

寄稿

脳神経外科教授選の経験から

斉藤敦志

弘前大学脳神経外科学講座 教授

(2022 年 8 月 22 日受稿、2022 年 8 月 22 日受理、連絡先：斉藤敦志・〒036-8562 青森県弘前市在府町 5 弘前大学医学部 医学研究科脳神経外科学講座)

私は、2022 年 5 月 1 日をもって弘前大学脳神経外科学講座の教授に就任しました。6 か月前からの公募の準備から始まり、最終選考を経て 3 月 30 日に内定しました。内定時点では、東北大学脳神経外科非常勤講師の立場で、仙台医療センター脳神経外科医長として、脳神経外科の開頭手術全般を若い先生と共に担っていました。教授選の内容については、あまり表に出ることはなく、各大学ごとに相違もあるとは思いますが、私の経験した教授選の経過をお伝えし、今後、医学部教授を目指す若い先生へのエールになれば有難く存じます。

私の仙台医療センターでの勤務は、2004 年の脳神経外科専門医受験前の 4 か月間、2017-2019 年、その後に広南病院での手術修業を経て、2021 年から 2022 年 5 月までの計 3 回に渡りました。いずれの期間も、脳外科医にとっては大切な修業期間であり、立場は違いましたが、豊富な症例を経験させていただきました。論文作成や手術技術の向上、臨床医としての成長において、大変、勉強になりました。あらためて、ご指導いただきました、櫻井芳明先生、上之原広司先生、西野明子先生、宇都宮裕先生、鈴木一郎先生、佐々木啓吾先生、井上敬先生そして江面正幸先生に感謝申し上げます。東北大学脳神経外科は、比較的細かく異動があり、多くの施設で臨床経験を積める利点があります。私は、1998 年の入局から 2022 年 4 月まで 12 回の引っ越しを経験し、11 か所の病院で修業してきました。大学病院での勤務経験は、入局当初と専門医受験時の他は、専門

医取得後は特任助手としての 2 年間しかなく、academic position を積み上げる期間はありませんでした。非常勤講師として、地域の関連病院としては当時多くの手術症例を有していた青森県立中央病院での勤務が計 3 回、7 年間に及びました。その後に仙台市内の High volume center である広南病院や仙台医療センターでの手術修業が 5 年になりました。脳血管障害の外科治療をはじめ、良性脳腫瘍の外科治療の経験が主な手術実績であり、これまで 1,083 例の major surgery の経験があります。教授選応募の直近 3 年では、脳動脈瘤クリッピング 200 例、脳腫瘍摘出術 100 例を集散的に経験させていただいておりました。手術以外の活動としては、脳卒中初期診療 ISLS (Immediate Stroke Life Support) のコーディネーター、2007 年からは脳神経外科学会同時通訳団、青森県立中央病院時代には、カンボジアでの手術支援活動、小学生のための脳卒中教室を開催していました。これらの活動は、自主的な活動であり小規模ではありましたが、珍しいせいか、教授選考委員から質問も多く受け注目されていたように思います。また、Stanford 大学脳神経外科に 2 年半留学経験があり、脳虚血の基礎実験に従事していました。activity の高い研究室で勉強できたおかげで、比較的 impact factor の高い雑誌に、14 編の基礎研究論文を first author として発表し、American Heart Association の主催する Stroke や、世界脳神経外科学会の WFNS の学会で受賞する機会にも恵まれました。大学勤務の短

い私にとっては、研究実績を積む貴重な期間となりました。臨床関連の論文発表は、**first author** で 110 篇でしたが、症例数の多い関連病院で勉強させていただき継続的に執筆できたことを感謝しております。

弘前大学脳神経外科教授選考は、書類選考と最終選考の 2 段階でした。書類選考では、大学の **web site** から書式を **download** し、臨床実績（執刀手術件数 主な経験症例）、研究実績（学会発表、論文発表、獲得研究費）、教育実績（大学での担当講義、臨床実習）、抱負（臨床・教育・研究・地域医療）についての膨大な書類の作成が必要でした。東北大学脳神経外科では、年末に大研究朝会として、1 年間の各人の臨床活動や研究活動をスライドにまとめて、プレゼンテーションする機会があります。入局以来、毎年、全ての手術内容、手術件数、学会発表、論文発表についてまとめていたため、この実績についての書類作成に大変役に立ちました。私の場合は、大学での臨床・研究・教育経験が少ないため、獲得研究費や教育実績の内容は乏しいものがありました。広南病院と仙台医療センターでは、大学からの臨床実習生を受け入れており、実習生の教育を実績として記載しました。抱負についての書類作成には、とても難渋しました。大学病院の運営の抱負は、もとより、地域医療への取り組みも大学病院からの視点が必要であり、わからないことだらけでした。東北大学の富永教授、新妻教授にご助言をいただきながら、何度も修正を繰り返し、なんとか形に仕上げました。以前に脳神経外科の教授選考に申請し、書類選考で落選した苦い経験がありましたが、この時の準備のおかげで、約 2 週間で申請書類を準備できました。今までの申請は 2 大学ですが、弘前大学では、より地域医療の抱負のウェイトが大きく、手術や研究業績のまとめ方にも、大学ごとの違いが感じられました。申請書類の郵送期日までには間に合わなかったもので、締め切り当日に直接、弘前大学総務課に出向いて手渡しで提出しました。事務の方は驚いていましたが、その場で書類受領の確認をいただきました。

あとでわかったことですが、全国から約 20 名の申請があり、4 名が最終選考に進んだとのことでした。

最終選考では、およそ 2 週間の間隔で、弘前大学病院長の事前面談、外科系教授による手術審査、最後に最終面接とプレゼンテーションが課されました。最終面接は、午前に選考員による 30 分の面接、午後にプレゼンテーションがあり、脳神経外科の救急というテーマで 20 分の模擬講義と、10 分の抱負についてプレゼンテーション、10 分の質疑応答が課されました。病院長の事前面談は、仙台医療センターに来院いただき、約 30 分間の 1 対 1 の面接でした。お出迎え、会場準備などを手配し、本番に臨みました。人柄をみるのが目的のようで、雑談のような話合いで多岐にわたる質問を受けました。地域医療への取り組み、医局運営の抱負など、最終面接にも問われそうな内容が多く、事前準備の参考になりました。病院長面談の前には、電話やアンケートによる人格調査がすでに入っていて、以前の上司や同僚、病院スタッフからの情報も集めてあるとのことでした。手術審査は、審査員として外科系の教授が来院され、30 分の面接、その後の手術見学でした。面接は、病院長の面談と同様の内容でした。2 回目のため、比較的スムーズに回答することができました。新入局員のリクルートの工夫について問われ、最終面接でも問われるので準備をしておくようにアドバイスをいただきました。手術は脳動脈瘤クリッピングを見学いただき、症例と手術のポイントについて、あらかじめハンドアウトを作成してお渡しし手術を見学いただきました。臨床実習の学生が 2 名おり、全身麻酔導入時や手術中に学生も交えて審査員と話が進んだことは有難いことでした。症例は、比較的難易度の低い中大脳動脈瘤の **clipping** を選択し、90 分程で無事に手術は終了しました。教育的な配慮も考慮して臨床実習の学生にはいつも以上に声掛けを行いながら手術をしたせいか、とても疲れたことを記憶しています。

模擬講義と抱負のスライド作成は、正直、大変な労力を要しました。過去の先輩方の教授選のスライドを参考に作成して、大学医局に通って富永教授、新妻教授、中川教授、金森准教授の前でプレゼンテーションを見ていただき、ご指導をいただきました。スライドの色使い、文字の位置、動画内容、話し方、全てに渡って厳しくご指導いただき、何度も

修正を繰り返し、何とか、前日に最終版ができました。この場を借りて、ご指導いただきました先生方に感謝申し上げます。

最終面接前日に弘前に入り、当日は広い会議室に1人待機して缶詰状態でした。事務の方が面接会場まで誘導し、面接では8名の選考委員が並んだ中で、各委員から1-2つの質問を受けました。展開したい研究、学生への対応、リクルート、地域医療、脳血管内治療専門医の育成、大学での subspeciality 分野の拡大方法、国際医療支援活動など、多岐にわたる質問でしたが、想定された質問がほとんどでした。なぜ、先生は東北大学でえらくなっていないのか？と質問され、答えに窮しましたが、自分の力不足です、と答えたところ、少し笑いもあり、終始、和やかな雰囲気です。無事に面接は終了しました。模擬講義と抱負のプレゼンテーションは、集中しすぎていたためか、正直、発表中の記憶はあまりありませんでした。夢中になって話をしていたと思います。40名ほどの各科の教授や助教以上の教員が聴衆でしたが、聴衆の表情はよく見えていました。最後のスライドが終わり、30分が経過していたことを確認し、予定通りの内容、速度で無事にプレゼンできたんだと実感しました。帰りのバスの中で、総務課から適任者に選出されたと携帯電話に連絡が入り、ほっとしました。

あとで選考委員の一人から伺った話では、大学病院である一つの分野の specialist として経験を積んだ先生ではなく、広く脳外科領域の手術経験

があり、医師不足の中で地域医療をしっかりと担える脳外科医師を育成できる人物が望まれていたとのことでした。私の場合は、青森県立中央病院での比較的長い勤務経験や、仙台市内の high volume center で培った脳血管障害と脳腫瘍の両者の手術経験が、弘前大学のニーズに合致していたのかと思いました。医師としての実力のつけ方やキャリアの積み方は、多様であり、運や周囲に影響され、自分のデザイン通りにはいかないことが多いと思います。私の場合も、教授に向かって日々努力していたわけではなく、与えられた環境で、わからない中でもがきながら修業を継続してきたように思います。当然、臨床医としても研究者としても未熟であり、発展途上であることは間違いありません。大学人としてのこれからの歩みには不安も多いですが、自分の適性などを考えるのではなく、今まで通りがきながら、与えられた環境で自分を磨いていきたいと思っています。新しいステージで、求められるものが多くなることに感謝して、仲間と一緒にいい医局になるように尽力していきたいと思っています。

拙い内容で恐縮ですが、教授選考のこれまでの経過をこのような手記にまとめる機会をいただきました江面先生にこの場を借りて感謝申し上げます。また、今まで温かい雰囲気です。成長を見守っていただきました、仙台医療センターの諸先生方、病棟看護師をはじめとするスタッフの方々にあらためて御礼申し上げます。誠に有難うございました。